



展示作業の様子。美術画廊では作家本人ではなくそれぞれの担当業者（取り扱い画廊や、紙・額店など）が主に展示を担当する



レベル（絵を觀賞する目線の高さ）を計りながら展示していく



今回主催の長谷川先生（日本画コース教授）と本学院生の作品



エレベーター内の広告物入れも仕事のひとつ

美術画廊での仕事について

——そうすると、美術画廊に移られてから、最初の大きな仕事が、中田ナオトさん（25期デザイン科セラミックデザインコース卒、現在美術領域准教授）の展覧会になるわけですか？

はい、名古屋三越が運営しているファッションビル「ラシック」の、1階ラシックパサージュ（イベントスペース）での展示ができるとわかって、頭に浮かんだのが中田先生でした。何か展覧会をしていただけないですかと、直接お願いにあがりました。学生の頃から、この人は作家として才能がある方だと、ずっと思っていたんです。

——あのライオンシャンプーですね?!（笑）SNSでも、とても話題になっていました。本会報誌でも、開催された2022年に名古屋三越に取材に参りました。（NUAPRESSNo.29に掲載）かなり手応えがあったんじゃないでしょうか。

ありがとうございます。賛否両論で意見もいただいたのですが、あれだけ多くのメディア取材が美術画廊にきたことは、これまで無かったです。非常に注目された企画でしたね。当時の名古屋三越の社長から、直々に中田先生に感謝のご挨拶があったくらいです。

——三越が何か新しいことをしようとしている、というムードを感じた展覧会でした。

中田先生との企画では、5月に行った個展、それから「メイゲイのコウゲイ」をすでに一昨年から開催してまして、今年もこの秋に開催します。名古屋芸術大学の同窓生では、紙造形作家のRYOSUKEさん（山田亮輔／46期イラストレーションコース卒）を担当させていただいています。また本日小画廊にて展示されていた、鍋島焼の陶芸作家、山本拓男さん（10期デザイン科卒）も同窓生ですね。それから、陶芸家の加藤高宏さん（1990年洋画科入学）も2年おきぐらいで個展をお願いしています。



陶芸家の山本さん。陶芸により興味を持ち、親しんでもらえるよう、材料を準備して来場者の目の前で絵付けの様子を見せる。

——今進めてらっしゃる、お仕事・企画はどんな内容でしょうか？

このボード（いつも携帯しているバインダー）をご覧くださいとあらゆる会期の仕事書かれています。2ヶ月、3ヶ月先の展覧会のために、必要な経費、ダイレクトメールやポップの手配などの宣伝、その効果、会社に申請を行うのが主な仕事です。それから、作家さんとのやり取りを進め、展覧会に向けて準備していきます。ですので、常に少し先の展覧会のことを考えていて、設営時や会期中、作家の方々にご挨拶したり、お手伝いする機会はありますが、販売を中心に進行確認をしながら申請書を作成しております。



年間のスケジュールが書かれたバインダー
細かなメモがぎっしりと書かれている

——意外ですね。現場にいたことが多いのかと思っていました。

はい、最初はこんなに事務作業が多いとは思っていませんでしたので、少し大変でした。ただ、これまでの別部署での販売の知識もあり、また大学で学んだ学芸員の知識も活かしていると思います。学芸員資格を持っている人が初めて来た!と今の美術マネージャーに言ってもらえました。でも、特に私は扱いにくいかもしれませんね（笑）

作品や展示について専門性のある話をしていると、造詣の深い販売員が居ることを、心強く思ったださる作家さんもいらっしゃいます。お客様にご質問をいただければ、特に陶芸関連については、陶房にも勤めていましたので、詳しくお話しできますが、私が出過ぎるのも良くないので、様子を見ながら接客はしています。美術につ



山本さんは伊万里・有田焼の伝統工芸士として指定されている

いての専門的な話をさせていただいている時は、やはり楽しいひとりで、やりがいを感じる瞬間でもあります。

美術画廊のこれから

——百貨店という場所は身近でも、なかなか美術画廊まで足を運ぼうという方はまだまだ少ないですね。

中田先生にご協力いただいた「メイゲイのコウゲイ」については、販路を広げたいという意味でも、より幅広い層のお客様を呼び込むための企画といえます。やはり、私たちが今やるべきことは、出品している作家さんやお客様を、若い世代に繋げていかなければいけないんです。『メイゲイのコウゲイ』は今年で3年目になりますが、年々売り上げは増えてはいるものの、まだまだ数十万というところ。社内でも色々な厳しい意見もあるのが現状です。私としては、地元の大学を応援する、若い作家さんを共に育てていく、そんな気持ちで企画していると社内にはアピールしています。



『メイゲイのコウゲイ2025』展示の様子

——やはり学生さんの作品なので単価が低い事もあって、売上という部分では大変ですね。でも、昨年「メイゲイのコウゲイ」を観覧にこのフロアに来る途中で、普通にお買い物にきているお客様が、「知り合いのお子さんが美術画廊で出品しているんだよ」なんて話しているのが聞こえて、少し嬉しい気持ちになりました。

一般のお客様に、百貨店の上の階、しかも奥まったフロアまで来ていただくのは、大変なことなんです。そうやって企画を通して、美術画廊も認知度が上がるのはありがたいことです。

来れ!名芸生!

——将来やりたい企画や展望は何かありますか？

将来といっても、年齢的にはあと10年くらいになっちゃうんですけど（笑）念願叶って入った部署で、これまでは思い切って精一杯お仕事してきた

つもりなんです、少し落ち着いて自分自身守りに入ってしまったのではないかな?というところです。



様々な提案で、幅広い年齢層のお客様を取り込みたいと話す

今考えているのは、私のように美術画廊でお仕事してくれる方を、名古屋芸大の方に繋げていきたいと思っています。この会報誌を読んで、美術画廊で働いてみたい、さらに言えば、美術画廊で展示をしてみたい、と思ったださる方も増えると思うと思っています。

正直なところ百貨店の美術画廊のスタッフというのも、かなり狭き門にはなります。私も最初から美術画廊でお仕事したかったのですが、まず入社後は当社グループ内店舗で接客研修を経て、名古屋栄三越店の紳士フロアのスタイリストをしぱらくしていました。

ただ販売の経験は今の仕事に活かされていますし必要になってきます。いろいろな事を面白いと思える方なら、向いているんじゃないかなと思います。

——きっと学生さんの中でも、アートは好きだけど何をしたらいいかはハッキリしない、でもそういうこだわりが無いという意味で、アートに関わるいろいろなカテゴリーのお仕事ことに興味を持てるという人も多いと思います。

今は私がこの画廊にいますので、アーティストを目指したいという若い皆さんにも、展示の相談など、どんどん尋ねてきていただきたいと思って

名古屋栄三越 7階《美術画廊》にて、名古屋芸術大学が関わる2025年度催事スケジュール



◎RE展（若手日本画家展、長谷川喜久先生主催）
>>7月30日（水）～8月5日（火）
◎メイゲイのコウゲイ2025（工芸コース在/卒業生、工芸コース主催）
>>10月1日（水）～10月7日（火）
◎加藤高宏作陶展（陶芸作家）
>>10月8日（水）～10月14日（火）
◎Tail Wind展（若手日本画家、長谷川喜久先生主催）
>>11月12日（水）～11月18日（火）

>>>詳しくは名古屋栄三越 7階 美術画廊
052-252-3693（画廊直通） まで

第52回卒業制作展にて 企業賞〔同窓会賞〕を授与



第52回名古屋芸術大学卒業・修了制作展（2025年2月15日～2月24日）にて、企業賞として同窓会賞（学部生対象）を2名に授与しました。美術領域からは陶の作品で竹田歩里さんの《家の環》（コミュニケーションアートコース）、デザイン領域からは、カタツムリを観察記録した作品、菱田夏未さん《snail's ecology and friendsign》（メディアコミュニケーションデザインコースのお二人が受賞されました。受賞後に、作品についてお話しいただいたインタビュー映像が同窓会のYouTubeチャンネルにございます。それぞれの個性を感じられるインタビューになっています。ぜひご覧下さい。竹田さん、菱田さん、受賞おめでとうございました！



同窓会賞の選定は、同窓会評議員によって決定しています。全会場をまわり、ひとつひとつの作品を観ながら、会場に制作者がいればお話を聞き作品への理解を深めていきます。その後、投票によりいくつか作品を絞り、最終的には話し合いにて決定されます。



ミラノで開催される「Salone del Mobile.Milano〜ミラノサローネ国際家具見本市」をご存知でしょうか。世界最大規模のプロダクトデザイン見本市である「ミラノサローネ」に、35歳以下のデザイナーを対象とした「サローネ・サテリテ」という、若手デザイナーの登竜門のプロトタイプ展示会があります。そのサテリテに過去出品した服部さん。そして今年、現在大学院2年の杉浦泰偲さんも、出品することになりました。その成果展「Milano Salone Project 2025」を開催中の、服部さんと杉浦さんにお話を伺いました。

ースペースデザインの教室は色々伝説がありますね

教室の入り口にある一段上がったフローリングのスペース、あれを授業で作ったのが自分たちの代です。最初は建築の基本的な作り方を勉強しようっていうのと、床があった方が家具を展示するのにふさわしいんじゃないかと。昔は工夫して遊んでましたね。

今年のミラノサローネ出品作品《Juicy》について

庵治（あじ）、庵治牟礼町という香川県の産地で、そこで産地として墓石だけでなく色んなプロジェクトが起こっていて。コロナの頃から2020年位かな、商工会の人と出会って誘われたのが始まり。これ、元々は個人のご自宅用としてデザインしたものなんです。ご依頼を頂いて石が好きだと言うので、じゃあちょっと庵治石でダイニングテーブルをデザインしましょうと。そこからコロナもあって色々うまくいかず、2024年に再開して納品させて貰いました。



初めてのサローネ出品の時

当時は、子供のワークショップとかをやっていて、まだサローネのことを知らなかったんです。当時、平田哲生さん（デザイン科名誉教授）と非常勤だった高田さんから「学生プロジェクトにするから服部くんやったら？」って話をされて、ミラノの隣にレジオエミリアという都市自体が創造教育に取り組んでいる所があって、そこに興味があったので「ミラノ行ってしまうば、すぐ隣」くらいの気持ちで。でも結局レジオエミリアは行かず。サローネに行ったらこんなに凄い世界がある



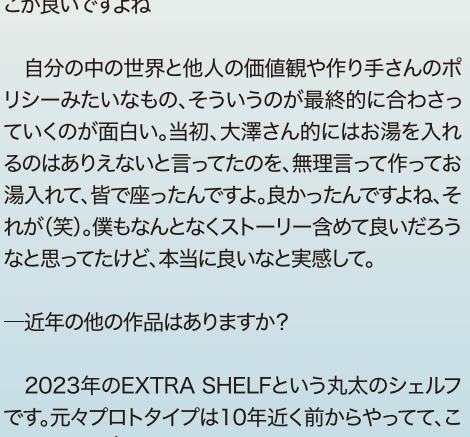
ミラノで開催される「Salone del Mobile.Milano〜ミラノサローネ国際家具見本市」をご存知でしょうか。世界最大規模のプロダクトデザイン見本市である「ミラノサローネ」に、35歳以下のデザイナーを対象とした「サローネ・サテリテ」という、若手デザイナーの登竜門のプロトタイプ展示会があります。そのサテリテに過去出品した服部さん。そして今年、現在大学院2年の杉浦泰偲さんも、出品することになりました。その成果展「Milano Salone Project 2025」を開催中の、服部さんと杉浦さんにお話を伺いました。

ースペースデザインの教室は色々伝説がありますね

教室の入り口にある一段上がったフローリングのスペース、あれを授業で作ったのが自分たちの代です。最初は建築の基本的な作り方を勉強しようっていうのと、床があった方が家具を展示するのにふさわしいんじゃないかと。昔は工夫して遊んでましたね。

今年のミラノサローネ出品作品《Juicy》について

庵治（あじ）、庵治牟礼町という香川県の産地で、そこで産地として墓石だけでなく色んなプロジェクトが起こっていて。コロナの頃から2020年位かな、商工会の人と出会って誘われたのが始まり。これ、元々は個人のご自宅用としてデザインしたものなんです。ご依頼を頂いて石が好きだと言うので、じゃあちょっと庵治石でダイニングテーブルをデザインしましょうと。そこからコロナもあって色々うまくいかず、2024年に再開して納品させて貰いました。



初めてのサローネ出品の時

当時は、子供のワークショップとかをやっていて、まだサローネのことを知らなかったんです。当時、平田哲生さん（デザイン科名誉教授）と非常勤だった高田さんから「学生プロジェクトにするから服部くんやったら？」って話をされて、ミラノの隣にレジオエミリアという都市自体が創造教育に取り組んでいる所があって、そこに興味があったので「ミラノ行ってしまうば、すぐ隣」くらいの気持ちで。でも結局レジオエミリアは行かず。サローネに行ったらこんなに凄い世界がある



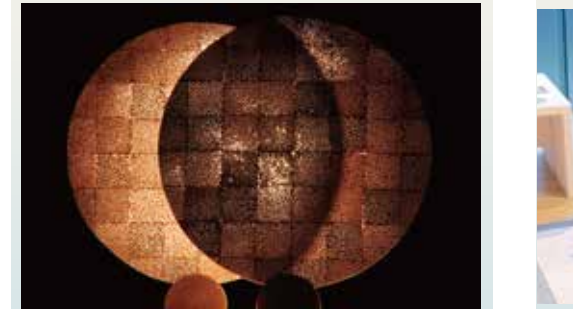
《Juicy》に使用された素材の解説。手に取ってみることも出来る



「Milano Salone Project 2025」
会期：2025年5月30日（金）～ 6月10日（火）
名古屋芸術大学 Art & Design Center Westにて開催された

思い入れのあるプロジェクトなど

今新しく作っているやつですね。ここ10年の自分の歩みの中で少しずつこれかになってのが始まってて、それを今度発表しようと思ってます。
ラタン、藤の照明で、これ、僕は殆どデザインしてなくて。藤家具で使われる藤って、断面が維管束っていう導管で形成されてるんです。ここに水分が入ると柔らかく曲がる性質がある。この自然のモノの魅力が身近な色んなものに良い意味で効果を発揮している、そこを見せたくて、こんな照明器具を作りました。スライスしただけの断片を少し四角くして、寄せ木みたいにして。写真ではお伝えしづらいんだけど、細かいピンホールなので実際はキラキラと歩く度に光るんです。まだやり始めですけどね。



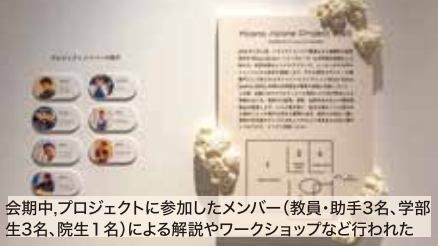
ラタンでできた照明

ー大学で教えるようになって何か変わりましたか？

そう変わった感じはしないけど、ただ、日々ちゃんとしていうって思いますよね。学生たちとやっていると、すごく単純なことでもいになって思える事があって。彼らが悩む姿を客観的に見て「こんなのでいいんだよ」って背中を押していると、それはやはり自分のデザインにもフィードバックされてきていますね。

ー逆に学生に励まされる？

それはあります。彼らって凄く純粋に進んでいくじゃないですか。知るってやっかいで、「なんとなくこれはこうなるだろうな」と先が見えてしまう。でも実はそうじゃないかもって最近思ってた、大人もそこで失敗していかないとなって。色々と整った状態っていうのは面白くないんだなと。



ーうまく取り繕うとダメですね

4、5年前にデザイナーの原研哉さんにお会いした時に聞いたんですが、凄く月並みだけど常にチャレンジしてて、自分が怖いと思う事を常にやる。あのレベルの人でもそうなんだなって。デザイナーで成功したと思ってからも全然楽にならないって言って、やはり一線にいる人は常に次のステップを設け続けてるんだなと。それを聞いて、じゃあもうその人生でいいやって。怖いですけどね、毎回。

ーいまでも面白い方を選び続けている？

そうね、苦しいけど(笑)



はっとりしゅんや：1987年三重県生まれ、デザイナー。名古屋芸術大学を卒業後、家具メーカー勤務を経て2016年4月にデザインスタジオとしてBouillon（ブイヨン）を設立。
身の回りの素材に改めて着目し、「うまみのきいた暮らし」をテーマにデザインした作品を国内外で発表するカタワラ、インテリアショップIDÉEにデザイン提供を行うなど名古屋を拠点に建築・インテリア・プロダクトと幅広くデザイン活動を行っている。
<http://www.design-bouillon.jp>

受賞歴：
Stockholm Furniture Fair 2020 Greenhouse、Best Performance Nominee / 2020 SHENZHEN DESIGN AWARD FOR YOUNG TALENTS 2019、Merit Award / 2019 11th SHACHIHATA New Product Design Competition、原研哉賞 / 2018 Toyama Design Competition 2018、入選 / 2018 IFFT Young designer award / 2016 Salone Satellite Award 2016、2nd Prize / 2016



ー「SaloneSatellite Award 2025〜サローネサテリテ」に《Kintoun Kits》が審査通過・出展、おめでとうございます。

ありがとうございます。今年は、全体的に日本からの参加が多かったようです。自分の向かいのブースで展示していた日本のデザイナーが、サローネサテリテ・アワード 2025の1位として選ばれていました。

ー今年のテーマ『NUOVO ARTIGIANATO: UN MONDO NUOVO//NEW CRAFTSMANSHIP: A NEW WORLD』ということで、職人の手仕事から、新しい可能性を探る、ということのようですが、どのようにこのテーマを捉えたのでしょうか。

ーこのウレタン素材を扱うことになったのは？

この作品を研究するきっかけは、学部3年に、子どもの家具を作る課題からで、その時に発泡ウレタンという素材にたまたま出会ったんです。壊れてもすぐ修復できるという機能性が、他の素材には無いところで、もしかしてミラノサローネに出せるきっかけになるかもしれないと、西岡先生から当時言われました。出せたらいいな、とぼんやり意識はしていました。

ーサテリエ会場についてから、作品を制作して展示の準備…大変でしたね。

会場で作っているのは自分のところくらいで、かなり注目されました。英語は苦手なので正



直不安でしたが、思い切って身振り手振り、体当たりでコミュニケーションしていけば、意外と伝わるんだなと。海外での発表は敷居が高いんじゃないかなと思っていましたが、日本では経験出来無いような評価をいただく事も多くて、まずは飛び込んでみるのが大事だと思えました。
サテリテの会場でも「面白い作品があるから皆で見に来たよ!」なんて集まってくれたり、とてもストレートに感想を述べてくださる人が多くて、日本との違いを感じました。皆さん思った意見をその場で率直に伝えてくださるので、手応えがすぐ伝わってきました。



サテリテ会場、杉浦さんのブースにて

ー様々な受賞、そしてミラノサローネに行って、かなりの手応えを感じてらっしゃいますか。

日本に戻って、展覧会のお誘いや、取材もいくつかありました。現地でお会いした、いくつかの企業様から打診や提案を頂いてます。まだ詳細はお話しできませんが、実現すると嬉しいです。

ーこの後も、様々な予定があると思いますが、院2年生としては、修了展が控えていますね。どのような展開があるのでしょうか。

次は同じ断熱材ですが「スタイロフォーム」という素材に注目しています。実はミラノにも什器として持って行っただけです。自分のテーマとしては、技法っていうよりも、『素材』というところから入っています。この面白い素材を、一番最適な形は何かになって考えた時に、家具だったり、おもちゃだったり、キットにしたり…どんな落とし込み方法があるかを、いつも考えていますね。

すぎうらたいし：2000年愛知県生まれ。現在、大学院デザイン研究科3Dデザイン スペースデザインコース
受賞歴：《Hayashi Sideboard》＝A' Design Award 2024-2025（イタリア）家具部門 受賞／London International Creative Competition 2024（イギリス）プロダクト部門 Shortlist 受賞
《Kintoun Kits》＝International Design Awards 2024（アメリカ）PRODUCT DESIGN部門 入選
JID AWARD 2025 NEXTAGE部門 銀賞



“好きな「えがく」ことが漫画に繋がった”

アントンシクさん 30期デザイン科 造形実験コース卒

ヤンジャン (<https://ynjn.jp/>) にて『境界のエン
ドフィール』が好評連載中のアントンシクさん。
漫画家になるまでのお話を伺いました。

漫画家への意外な道のり

最初は普通に就職活動をしていて、ゲームの会
社に行きたいと思ってカプコン、セガとかメジャー
な所を受けて、でも全然決まらず思い立って無計
画に東京に行きました。半年位フリーターをしてい
た時に、当時はネットにお絵描き掲示板というもの
があって絵描きが交流していたんだけど、そこで知
り合った漫画家さんから「君、描けるの？うちでアシ
スタントしない？」と誘われて。漫画家志望でもな
かったけど、その人が凄く絵が上手い人だったから、
勉強になるかなと始めました。一年経った頃に
アシスタント先に入社していた編集者が「今月原
稿に穴が空いちゃって、誰か描ける人いない？」と
言っていたら、先生から「彼、どうですか？」って。

それで初めて描いた10p位の短編が掲載され
て、3回ほど読切が掲載された後に連載の話が来
て、それが連載デビューになりました。賞に応募し
て担当がついてっていう経験をしていないから、漫
画家になる覚悟もないままそこからずっと漫画を
描いています。

—「ちょっと描いてみて」と言われて出してしまう事
が凄いです

昔からノートに描いたキャラクターの端っこに



写真上左／『境界のエンドフィール』での実際の
原稿

上右／取材時、制作の様子を見せていただく



『境界のエンドフィール』
コミックス版最新巻は第6巻ま
で発売中！（原作：近藤たかし）

バックストーリーを書くというような事はやってい
て、それが生きてるのかな。普段から言ってるけど、
デザイン科/造実で勉強してきた事って凄く今の仕
事に繋がってると思う。造実では先生から「コンセ
プト、コンセプト」って言われてて、考えることが身
についていたというか。自分の表現したい事、ス
トーリーの効果的な見せ方や大事な場面のコマ割
りとか、デザイン的な考え方で最初の頃は漫画を
作っていた気がします。

—そのアシスタント先の先生とは今でも交流が？

そうですね、尊敬しすぎて距離があるけど(笑)。
中村嘉宏先生という方で『キングゲイナー』という
作品のキャラクターデザインとコミカライズをされ
ている時期にアシスタントをしていました。中村先
生はエロ業界の方でも有名で、そちらでは「胃之上
奇嘉郎」っていうペンネームなんですが、人生の
師というか今でも日本で一番上手い人だと思って
ます。
中村先生のアシスタントをしている時に、あきま
んさんっていうカプコンで『ストリートファイターII』
のアートディレクター/プランナーをされていた方
がいるんですが(当時カプコンを離れて漫画を描い
ていた)、二人は知り合いで、あきまんさんの漫画
のお仕事が忙しい時に僕が彼のところで働いてい
る時期があって、そこに来た編集さんが「今月、誰
かいいないですかね？」って聞いて、あきまんさん
が紹介してくれたんです。あきまんさんは昔カプ
コンを受けようとしてた僕からしたら神みたいな人
だったから、その人とこんな形で繋がれるなんてね。
今でも気楽に話しかけて下さって、お世話になって
います。

現在連載中の『境界のエンドフィール』について

原作の近藤たかしさんと僕が友達だったという

事もあるけど、近藤さんと担当さんが二人で企画を
練っていた時に、その担当さんがずっと僕を作画に
推してくれていて。以前原作付きの仕事をした時は
脚本みたいに文字でネームが来ることもあったけ
ど、この作品は原作者も漫画家なので、コマ割りに
簡単にキャラクターが描かれた状態で送ってくれ
るので、とても助かるというありがたいです。まあ
こっちでガラッと変えちゃう時もありますけどね。

—医療系は取材が大変そうですね

原作の近藤さんはめちゃくちゃ取材してると思
います。僕も付いて行く時もあるけど、ビジュアル的
に理学療法士さんの体の動きとかを見せてもら
うくらいで。順天堂大学病院の先生に監修をお願い
して、制作中にアドバイスも貰っています。

—専門学校での講師もされているとか

同期がその専門学校で働いていて「漫画家だよ
ね？じゃあうちで講師やってよ」って呼んでくれて、
常駐ではなく年に1回のゲスト講師みたいな感じ
で。でも本当に人に教えるの向いてないなって。い
まオンラインで頼んでるアシスタントさんがいて、
例えば「ここの線をこの隙間にこう引いてください」
とか指示をすべて言葉で伝えないといけないんだ
けど、言語化が本当に苦手で。

アシスタントもオンラインへ

初めは部屋にアシスタント用の机を並べてや
ってて、名古屋に帰ってからも暫くは来て貰ってま
した。でも名古屋は本当に人がいなくて、いくらSNS
で募集のポストが拡散されても来なくて。最近の新
人はアシスタントをやりたいがらないという話も聞
きますね。

昔は学生に上手い人がいて手伝って貰ったりも

あったけど…恥ずかしい話、今の奥さんはその専
門学校の学生だったので。今はそれぞれがアシス
タントをお願いしているので、お互いに手伝ったり
とかはないです。彼女は同人メインで雑誌の方は
頼まれたら描く感じで、どちらかというと締切に追
われているのは僕の方。隔週でヒューヒュー言いながら
徹夜してます。

—同人は今、販路も増えていて売れますよね

男性向けもそうですけど女性向けのエロはめ
ちゃくちゃ来てますね。こっそりスマホで見れる時
代なので女性も買いやすいんです。
商業の場合は出版社や書店を挟むので、単行本
を出しても印税は最大で10%、例えば某口ポッ
トアニメのコミカライズだと、タイアップしてる会社
にも持ってかれるので、5%とか3%の場合もある。
なので同人で稼げるなら、そっちの方がってなります
よね。僕は商業メインで同人は殆どやってないんだ
けど、奥さんが稼いでるのを見るとやってみたい気
持ちはあります。今の連載は作画だけなので、また
何か自分で全部やりたいなって。



商業と同人

個人的には商業と同人はうまく住み分けでき
ていると思っていて。例に出すのもアレだけど、僕の知
人のとある漫画家は、最初は少年漫画の企画を
練ってて上手くいかなかった、でも自分の描きたいエ
ロを描いた時にバズった。少年漫画のようなマス
に受ける作品は商業ベースで編集はじめ色んな人
と作り上げるものだけど、皆エロも読むしワンピー
スも読むじゃないですか。個人の欲望というのか、
そういうのは別だったりするから両立し続けるん
じゃないかな。

同人で売ってる作家ってレイアウトから見せ方
まで、凄く勉強してる人が多い。個人で作るから独
りよがりの印象があるけど、なんなら商業で活躍さ
れていた方が同人に行ったりもするし、やりたい表
現って商業の中だけで出来るものじゃないから、そ
の隙間を同人が埋める、そんなイメージです。

制作について

制作は殆どデジタルです。アナログの時はコピー

用紙に描いたものをスキャンして、トーンや背景を
入れます。(持参頂いた原稿を見ながら)『エンド
フィール』でいったら…この時はアナログで描いて
スキャンした回で、ついこの間締切だった回は、イ
チからデジタルで描いてたり、気分次第で変えて
ます。

案かどうかと言えば、アナログの方が楽は楽。
僕的にはアナログとデジタルで線が変わってると
思うんだけど、人が見ても分からないらしいので、
どちらでもいいかって。制作環境は、僕は自宅では
もっと大きい液晶タブレットでやっていますが、
iPadのみの漫画家さんも多いですね。

造形実験コースのこと

当時、港の方で「アートポート」という名古屋市の
事業があって、授業の一環で造実の皆で企画を
やった事がありました。初めはクラス全員が「誰か
が何とかするだろう」って人任せで、会議の日に誰
ひとりこなかった事があって問題に。ちゃんと謝り
に行って、その後は会議にも参加するようになった
んだけど、学生っぽいと言えばそうなんだけど、
これは良くないと反省した思い出です。夏休み
だったので映像を使って子ども達に遊んでもらえ
るような展示をしました。



造形実験コース時代の恩師、津田先生との記念撮影

津田さん(津田佳紀先生)は僕の作品を面白
がってくれて、それが優しい印象になっているの
かな。池側さん(池側隆之先生)は静かに怒ってる瞬
間もあった気がします(笑)。佐藤さん(佐藤英治先
生)は数年前に飲み会の席で久し振りにお会いしま
した。学生の時に佐藤さんと津田さんが話してる
場に僕が偶々いて、津田さんが「安田が毎回遅刻
する」と話したら、佐藤さんが「いや、それは安田の
個性だから、直さなくていいと思う」と言ってくれ
たのが印象に残ってます。造実で良かったって思
いますね。

思い入れのある作品

全部あるっちゃあるんですけど『リンドバーク』
という作品の後に『恋情デスペラード』って作品を
描いたんですが、『リンドバーク』の後にめちゃく
ちゃスランプになって、もう漫画家辞めようかと
思った事があって。『リンドバーク』が跳ねなかつ
たことで、これでもダメなら自分はもう人に受ける
作品は作れないかもってなってしまった。その頃は
名古屋に帰って来た頃で、当時の編集長が悩ん
でる自分を「ちょっと東京においで」って呼んでく
れて「君の漫画が分かった。君はもしかしたら自分
はストーリーの人と思っているかもしれないけど、君
はキャラクターの漫画家なんだよ」というような事
を言われて、ハッとしたんです。漫画に大事な
のはキャラクターなんだなって。その時点で漫画のキャ

リアは8年位だったと思うけど、初めて気づいた。
びっくりしてたら編集長が「新人にはよく言ってる
事なんだけど」って(笑)。

それでキャラクターに軸を置いて描いてみたの
が『恋情〜』だったんです。この二つはその後の漫
画家人生の作品の軸になりました。

よく漫画家さんが「キャラクターが頭の中で勝手
に動く」って言ったりするけど、それまでは「勝手に
動くんってピンとこないな、そういう人もいるのか
な」って。でも少なくとも少年漫画の分野では、
それが本来あるべき漫画の姿なのかなって。

—在校生や漫画を目指す人に向けて何か伝えたい
ことはありますか？

漫画は元々好きではあったけど、自分が胸を張
れるものって子供の頃から絵しかなかったから、漫
画家になれたのは巡り合わせ、運だと思ってます
が、それが本当にありがたかったなと。僕、本当に
ふっと思い立って上京したんです。だから名古屋
帰ってきてアシスタントさんに「東京行ってみるの
も良いと思うよ」って勧めた事があったんですよ。
でもその子はうまくいかなくて心を病んでしまっ
て。安易に勧められないけど、でも動かないと運も掴
めないし…難しいですね。

—今後の展望は何かありますか？

先程も話に出たけれど、また自分のオリジナルで
やってみたいなっていうのもありますが、商業だけ
でなく、同人にも興味があるのでそちらにも挑戦し
てみたいです。

展望とはちょっと違うかもですが(笑)。



あんとしゅく／漫画家

1980年、名古屋生まれ。
2004年からいくつかの読み切り作品の発表
を経て、2006年に『WebコミックGENZO』よ
り『ガゴゼ』で連載デビュー。主な作品は『リン
ドバーク』『恋情デスペラード』(ともに小学
館)、2020年放映のテレビアニメ『天晴爛
漫!』ではキャラクター原案とコミカライズを
務める。超絶技巧とも評される力強くも柔ら
かい、勢いのある線で描かれる世界は観る者
を物語の中へ引き込む。現在は『ヤングジャン
プ+』(集英社)にて『境界のエン
ドフィール』を連載中。(2025年7月現在、6巻まで刊行)